

### 猫三昧

九月の声を聞くと、日中はことのほか残暑の厳しい南国鹿児島でも、入来町の早朝はにわかには肌寒くなる。

入来町は薩摩半島の根元の辺に当たり、北の堺を川内川が東支那海を目指して悠々と流れ、その彼方に紫尾連山の頂きが望める。南は長らく島津の軍勢の北上を阻んで来た堅牢な入来峠によって支えられて来た、要害の地、いわゆる山北ともよばれた小さな町である。

この地方の季節の変化は劇的とも言えるほどの速さで、ゆっくり秋を楽しむ間もないほど冬が駆け足でやってくる。それは夏も同様で、春も駆け足で過ぎて、瞬く間に猛暑が訪れるのだ。帰郷以来、殆ど袖を通す間もなく洋服掛けに吊るされたままの春と秋のブラウスやワンピースが、四季が平等に訪れる東京との違いを如実に物語っている。

信子にとって、今年が入来町で七度目の秋を迎えることになる。暑い夜は邪魔でさえあったタオルケットを、いつしか肩まで引き上げて眠っていた信子は、足の親指にじゃれつく子猫に目を覚まされた。見ると七匹の親猫子猫がWベッドの和雄と信子の足元にうずくまっていて、起き上がった信子を見上げている。昨夜までは深夜の庭で虫とじゃれていたし、部屋に戻ってもソファやピアノの上でそれぞれ別れて眠っていた猫どもなのだ。「セデイ、アン、ヤスベエ、ピッピ、タマ、ヤスキチ、ママナスビはいいとしてウスとチッチがいないなあ。」

信子は目で確かめると、つとトイレに立った。これはまさに猫の保育園だ。ドアが開くと、サッと信子の足元をかすめて一緒に部屋を出てしまう素早いピッピを目で追いながら信子は思った。去年の秋は三匹だったが、まさかこんな状態になるとは信子も予想していなかった。只今、野島家は飼い猫が十匹。そのほか車庫には野良の祖母、娘、孫の三代五匹がいるのである。

ことの始まりは八年前に逆上る。

当時和雄と信子は、その五年程前から長男伸雄の写真の現像の店の近くに移り住んでいた。東京は府中の郊外であった和雄の通勤には不便であったが、伸雄夫妻の家賃を負担してやることで、店を出したばかりの若い夫婦の家計を助けることが目的であった。その後伸雄夫妻には孫が生まれたので、和雄と信子、それに仏教大学生の三男、Y生命保険本社勤めの末娘と東京には珍しい七人の大家族となった。その借家は七十坪ほどの建地に、同じく七十坪ほどの6DKで、一階の十二畳の洋間が若夫婦の寝室、それに家族共用の八畳の茶の間とDK、二階の四部屋に和雄夫妻と二人の子供が納まっていた。それは築後二十年も経っている古い家であったが、バブル期のこととて驚く程高い家賃であった。しかし和雄夫妻は、それも一時のことだと我慢して住んでいた。彼らは停年後は鹿児島の実家に帰り、養護施設にいる姑を引き取って面倒を見ながらカントリーライフを過ごす予定であった。そしてそれも翌年に控えていたのだ。

その夏の夕方、呼び鈴に玄関に出てみると、滅多に訪れることもない隣家のおばあさんが小さな箱を持って立っている。

「一寸見て下さい。今庭先にこれが落ちていたんですよ。どうしたらいいでしょうね」

と玄関先でそっと箱の蓋を開けた。中を覗くと、二十日鼠ほどの黒い子猫

がうづくまっていた。目は開かず声も出さない。これは四、五時間ほどの命だと信子は思った。

「まあ、可哀相に。長くは生きないでしょうね。死んだら子供たちに庭に埋めさせましょう。置いて行っていいですよ」

と信子は気安く言った。もともと信子の子供たちは動物好きで、特に長男は小さい頃よく子猫を拾って来るので、信子は何回も庭隅に育たぬ猫の墓を作らされたものだった。

いつの間にか三男の孝雄が、薬屋から子猫用のミルクと小さな哺乳瓶を買って来ていた。そして片手に子猫を握って、気長に哺乳瓶をくわえさせ、とうとう飲ませることに成功したのだった。かくてこの子猫は命拾いした。見るからに茄子のような、艶のある黒に近い色だったので、孝雄が「ナスビ」と名付けたのだった。

ナスビは成長するにしたがって、長く柔らかな毛並みになり、両頬や耳にグレ - の長い毛が張り出すように生えてきた狐のしっぽのようなふさふさとした尾とずんぐりと太い足を持っている。雄猫で、近所の若い女性の獣医さんにペルシャの血が入っているとされた。性格はおとなしい上に人懐っこく、誰にでも抱かれて爪を出すことは殆どない。ペットとしての長い歴史を持っていると思われた。魚より肉の好きなどころも西洋の遺伝子なのだろう。

年も明けた頃、庭先にナスビそっくりの顔をした狐色のペルシャ猫がいた。野良猫で、やつれていたが品のよい顔だちで、何らかの理由で捨てられたのだろうと思われた。信子はそれがナスビの親だと確信した。ナスビの食べ残しの餌を靴脱ぎの石の上に出してやると、日に二回くらい来るようになったが、決して上がって盗み食いをするようなことは無かった。やがてその猫はお腹が大きくなって、餌を貰いにくる回数も多くなった。

家の周りの葉桜も青葉となって、鹿児島への転居の日も近づいて来た。前年和雄は子会社の社長となったので定年が一年延長した。鹿児島の新居の着工が決まっていたのと、その借家の契約が切れるので、和雄は子供たちと東京に残るが、信子が一人鹿児島に戻ることとなった。長男伸雄夫婦は店に近いアパートへ、和雄と孝雄、陽子は孝雄の大学近くのマンションへと転居が決まり、それぞれの引っ越しの準備が始まった。伸雄夫妻がいち早く引っ越しを完了した。

信子は夫や子供たちが勤めや学校に出ているので、一人で四十年近い東京生活の積もり積もったガラクタの整理に明け暮れた。そんなある日、二階のベランダに置いてあった荷造り用のダンボ - ル箱の中に、そのママ野良が子猫を生んでいるのに気がついた。覗くと去年のナスビそっくりの黒猫が三匹お乳を吸っている。その横に狐色の一匹が反対の方を向いてミ - ミ - ないている。信子は手近にあった布団叩きの先でそっとその猫の向きを変えて母猫の乳房の前に押してやった

荷造りなどで二階のベランダも人の出入りが多くなった。親猫は子猫をくわえて庭の隅に移動して行った。引越し迄あと五日となった雨上がりの朝、信子が勝手口を開けると鼠が死んでいるようだ。よく見るとそれはあの狐色の子猫であった。つまみ上げると目を開けた。忙しい中であつたが、獣医さん迄連れて行った。若い女獣医さんは、

「大丈夫元気になりますよ。お忙しい間あずかりましょう」と言う。実は信子は貰い先を見つけてほしかったのだが、何故か切り出せなかった。

そんな訳でその子猫も鹿児島行きとなった。

二日後、和雄と子供たちの引越しが完了した。残りの荷物は全て鹿児島である。翌々は、引越し専用の運送会社の職員の手で三百個の段ボール箱が手際よくまとめられ、三台のトラックで一斉に運びだされた。ざっとあとの掃除までして十人程の職員が引き上げると、あとはもうガランドウの広々とした空き家である。

信子と猫どもは、手伝いに戻って来た和雄と陽子とともに彼らの引越し先のマンションに一泊して鹿児島まで一緒に行く手筈であった。

信子が落ちていた子猫を引き取りに行くと、女医さんは粉ミルクの小缶を六個信子にプレゼントだと言って手渡した。

「飛行機にはポケットに入れて乗れば大丈夫ですよ」

と智慧も付けてくれる。子猫は深めの菓子箱に、ナスビはズックのポストンバッグに入れて西巢鴨のマンションまでタクシーに乗った。

翌朝は羽田空港までまたタクシーである。一歳のナスビは航空会社のケジに入れて預けた。信子は女医さんのアドバイス通りに子猫をズボンのポケットに納めてチェックを通り待合の椅子でこっそり箱にもどした。かくて二匹の猫とも空路鹿児島までやって来たのであった。

会社から夏休みを取った陽子も和雄夫妻に同行していた。彼女は魔法瓶の湯で三時間毎に子猫のミルクを作る係である

空港に着くとケジの中のナスビは、すっかり脅えていた。レンタカーで入来町の家に着いても震えが止まらず、押し入れの中にうずくまったままで半日が過ぎた。結局転居した和雄一家が第一にしたことと言えば、川内の獣医さんまでナスビを連れて行き、鎮静剤を打ってもらったことだった。

注射で元気になったナスビは、今度は縁の下にもぐり込んで、いくら呼んでも出て来ない。心配した陽子は人相ならぬ猫相の絵を何枚も描いて、そのウオンテッドのポスタ - を見知らぬ町の辻々に貼って歩く始末となった。猫は家に付くというから、家を探しに出て迷子になっているかもしれないと一家は話し合った。

新築の家は、まだ完成していなかった。ベッドルームは出来ていたものの、ほかの部屋は床もなく、キッチンも仮のものなので、段ボールの箱の山の中で、弁当やパンを買っての食事の日々となった。和雄と陽子は、五日後には帰京してしまうから、その間の辛抱でよいのだが、あとは信子一人で何とかしなければならない。

移転の日は借家の契約の切れる日で、二年前から決まっていた。しかし田舎では納期の観念があまりないのか、完成が一ヶ月ほど遅れることも珍しくないらしい。それに田舎の人には東京での借家の契約延長が、どんなに面倒でお金が掛かるか分かっていないようだった。

しかし朴訥な大工さんが、父親と二人で、こつこつと一つ一つの作業を丁寧にやっているのを見ると、文句も言えない気分になってしまう。分業でせかせかと動く都会の大工さんに比べると、いかにもマイペースののんびりした仕事ぶりに見える。しかし大量生産の組み立てとは違って、手作りの実際の労働量は大変なものなだろう。

さすがに実際に和雄夫妻が引越して来てしまったので、大工さんの作業も突貫工事となった。早朝から暗くなるまでドリルや金槌の音がけたたましい。こんな家の床下に猫が潜んでいるとは到底思えなかった。

もう半ば諦めていた四日目の夜、三人が夕食をとっていると、ナスビがまだ未完の部屋の床の間から突然ニャアとなきながら顔を出したのだ。一同はホッとしたのと嬉しさで、顔を見合せ声をたてて笑った。

和雄と陽子が帰京し信子は一人になった。和雄が軽自動車を手に入れておいてくれた。二十五年前に取った運転免許証が役に立った。田舎は車がなければ何も出来ない。早朝ひとしきり城の下の馬場で運転の練習をしたのだが、まだ充分慣れない内に子猫の病気で獣医さんまで駆けつけねばならないことになった。

茶色の子猫は雌で信子はアンと名付けた。赤毛のアンを想像する毛色だった。野良の子だったせいかノミが毛の中に見え隠れする。信子はナスビのシャンプーでアンを洗ったが、それが原因で風邪を引かせたらしい。ぐったりとして熱く脈も早かった。信子は夢中でハンドルを握って犬猫病院まで空港道路の十キロ行程を走り抜けたのだった。

アンは元気になると、まだ大きめな鼠くらいしかない体なのにじっとしていない。両手で万歳をしながらナスビに飛び掛かる。もしナスビが優しくなったら、とっくに噛み殺されていただろう。ナスビは迷惑そうな顔をしながらも、適当にあしらうのだった。

秋には家も完成した。養護園から姑を引き取って東南の明るい部屋に移した。和雄と信子の設計で、トイレにも台所にも風呂場にも近い、庭に面した8畳間である。

夫妻の寝室は家の西側にある。十八畳の納戸を背に二十四畳の板敷きのシンプルな部屋である。南北両側の二つのドアで、座敷や台所とは遮断されている。新築祝いに帰って来た和雄は、新しい家の柱に爪を立てられてはかなわないから、猫どもは和室には出さないようにと信子に厳命した。

寝室と納戸の出入口はサッシのガラス戸である。そのままでは猫の出入りが出来ない。信子は専門店で頼んで、同色のアルミで猫の出入りの出来るような蝶番の付いた口を納戸のガラス戸の裾にはめ込んでもらった。猫の通る度にカッチンと小さな音がするのも楽しい。

姑と信子と猫の生活が始まった。姑の槇子はアンがお気に入りだった。独占しようとする自分の部屋の戸障子を締め切ってアンを連れ込むのだ。アンは嫌がるのだが、信子は槇子も淋しいことだろうとそれを黙認した。座敷に出なければ、そのくらいはいいのではないかと思った。しかし槇子は愛憎の感情が激しい人だった。時々「チョウ！」と怒鳴ってアンを叩くのである。子猫のことだから多少の悪戯はするだろう。台所で信子は気が気ではないのだがじっと我慢するのだった。夜も十時頃になるとアンは外へ出たがって必死に襖をカリカリさせる。その頃になると信子も「おトイレの時間です。外に出しましょう」

と槇子の目の前で外に出るのである。信子が連れ去れば槇子は怒ってまた連れ戻しに来るに違いなかった。しかし結局アンは一時間もすればカッチンと寝室に入って来て、信子の布団に滑り込むのである。

やがて冬になった。戸外で妙な声でなきわめいている猫がいる。みっともない声なのでどんな猫だろうと信子が窓から首を出して見ると、それがなんとナスビである。恋の泣き方もペルシャ語なのかもしれないと信子は思った。

ナスビの行動範囲はぐんぐんと広がって行った。そしてそれからの信子はナスビの戻る度に、喧嘩の傷の手当てと、長い毛に絡まるイノコツチの種を

ハサミで切り取る毎日となった。柔らかい毛に絡まったイノコヅチの種は、団子のようになって手では取れない。

アンちゃんは、育つにつれてだんだん黒い縞が出てきて、その辺によく見かけるただの虎猫になってしまった。大方は槇子の炬燵にいる。顔はなかなかの器量良しではあるが、槇子の気まぐれの折檻のせいか怯えるような目つきになった。二月になって、信子はアンに避妊手術を受けさせた。

六月末に役職を終えた和雄が帰って来た。槇子も猫を自分の部屋に閉じ込めることを遠慮するようになった。しかしその頃からアンは時折癲癇の発作を起こし始めた。間隔が短くなって二三日置きに起こすので病院へ連れて行った。手術の麻酔薬の加減だろうと、大柄で壮年の獣医さんは鷹揚に言った。信子はそれは過失ではないかと思うのだが治療薬を安くしてくれる訳でもなかった。

しかし信子は秘かに槇子の折檻も原因ではなかったかと思った。子猫時代は何にでもじゃれ、元気に駆け巡っていたアンだったが、その後は薬を切らすことが出来なくなった。そして呆然と椅子の上でうずくまったまま一日を過すようになってしまった。

和雄がアンの薬の係となった。様子をみながら薬を少しづつ薄めて飲ませる。間隔もだんだん開けてみる。しかし二三日飲まないと、思い出したように激しい癲癇を起こすのだ。それはまさに突然やってくる。椅子やベッドから転がり落ちると、ドンドンと頭を床に打ちつけるように痙攣を始めるジワッと尿がこぼれ出る。口には細かい泡を吹き出し、目はうつろになる。痙攣は三分ほどで納まるのだが、その間は手の施し様がないし、しばらくは正常に戻れない。

和雄が和室に猫の入ることを禁じて、アンは槇子の部屋とは無縁になった。そして薬でおとなしくなった分、甘えん坊になった。信子がワ - プロを打ち始めると、必ず膝に乗って来る。ひとしきり喉を鳴らしながら自分の前足をしゃぶったりする。夜は寝ている信子の頬をそとつづく。布団を持ち上げてやると滑り込んできて、くるりと回れ右をして彼女の腕を枕にして眠る。殆ど外に出ないから足も汚れていない。大食漢で雑食のナスビに比べ、アンは和雄の与えるカリカリの猫食を少量食べるだけだ。それなのに運動不足のせいかアンはいつしか丸々と肥ってずっしりと重い。

ナスビはと言えば、益々の発展ぶりで、貫禄たっぷりとなった。横顎の髭もピンとして目つきも威厳が出てきた。ふさふさの尾が高僧の持つ刷毛のようだ。すっかり外出が多くなって、家にいる時間は僅かとなった。そそくさと餌を食べ、ひとしきりチクチクをするとまた何処かへ出掛ける。

チクチクというのはナスビの癖である。小さい時に乳房を吸わなかったことの本能の名残りだろうか。東京に居る頃ナスビはよく伸雄の嫁の脇に首をつっこみセーターをチクチクとしゃぶっていた。転居後はタオルをしゃぶるようになったので、信子はチクチク用のバスタオルを用意するようにしていた。ナスビは乳房にしゃぶりつくようにタオルをくわえると両手でタオルを交互に押しながら、恍惚の表情で喉を鳴らしながらしばらくそれを吸うのである。堂々と辺りを睥睨しているその風貌で、タオルをチクチクしゃぶる姿は何とも可笑しい。尤も信子たちの他は誰も人のいない、無防備の姿勢が可能な状態だから見せる仕種なのだろうが。

乳房を吸う本能はアンも同じで、寝ている信子の脇を両手で押し始める。ナスビのようにしゃぶることはしないが、交互に押すとき爪を出すので単衣の寝巻のときは痛い。信子は手で叩いて叱るが、懲り性のない猫のこと、すぐまた繰り返すのである。とうとう信子はアンにもタオルを決めて、寝る時は脇に置いて猫の爪を防ぐようになった。信子は一度もママになれない病気持ちのアンにはどうしても甘くなってしまうのだった。

二匹の猫と榎子、和雄夫妻の月日は淡々と過ぎて行った。今、信子がふと振り返りこの間を思い起こしても、これまで何事も無かったようにさえ思えた。ナスビは完全にこの辺りのボスとなっていて、今や夜は家にいることも殆どない。時折り、雌猫が二三匹裏庭に見え隠れして、雄猫同志の威嚇のわめきが聞こえることもあるが、ナスビが怪我をして戻ることはなくなった。

まるまると肥ったアンは相変わらずソファでうずくまったままの毎日である。ある日アンは和雄のライティングデスクの椅子の下に排便した。きつく叱ったが翌日は便に尿までしてある。和雄は怒って叱り、絨毯を部分洗いして巻き上げて物置に仕舞った。アンは薬でボケてしまったかと思われた。信子は朝夕窓からアンを外に出すように心がけた。しかし外出などしていつっかりしていると失敗するのである。それが物陰でなくあくまでも和雄の机の前なのであった。

しばらくして、信子はカッチンのペカペカ動く部分を止めてあるネジがゆるんで下にさがっていて、外からは入れるが中からは出られなくなっていることを発見した。

「なんだ、原因はこれか。アンは僕に知らせようとして僕のところにばかりしていたんだなあ。叱って可哀相なことをした」

和雄は後悔していた。じっとしてばかりいるがバカではないことが分かった。和雄はきちんとネジを止めて軽く出入りのへらが動くのを確かめた。信子も時折はチェックしようと思った。

その後は大した事件もなく信子は入来町での五年目の春を迎えた。この五年の間、榎子は風邪で一度往診を受けた他は健康には何も問題はなかった。彼女は以前膝に水の溜まった時期があって、水を抜いたせいか関節から曲がっていた。普段は「足が痛い」と言うのが口癖で、杖なしでは歩けないように振る舞っていたが、誰も見ていない時の行動は実に素早かった。マイクで花の苗売りの声がしたので、信子が財布を持って外に出ると、榎子はすでに軽トラックの後で花を選んでいたのである。和雄と二人で車で外出し、すぐ忘れ物に気づいて戻ったことがある。驚いたことに茶の間でテレビを見ていた榎子が、すでに門の外に立っていた。

しかし九十歳を目前にしたこの冬の榎子は、にわかに衰えが目立つようになった。正月は数え年での卒寿になる。お祝いをしようとした東京の義妹から羽織が送られて、ささやかではあったが、お祝いの膳を設けた。しかし何の感慨もないようであった。

この頃はトイレの粗相が多くなった。汚れた下着を新聞紙にくるんで紙屑籠に押し込んであるのを、和雄は信子にも黙って焼却炉で焼いた。ゆるい便を畳や敷物に垂れ流したことがあった。鼻が曲がりそうな臭気にも、榎子はこれはコーヒーだと言い張った。普段あらぬことを言う榎子を厳しく諷める和雄も、その時は黙って信子に先立って拭いた。信子が紙の使い捨てのパン

ツの包みを買って来ると、

「バカにするんじゃないやありません。あなたが使いなさい」

と怒った。気丈さは健在だったが、あれこれと注文の多い食事も、こころなしか細くなったように思えた。

この年は、ナスビの新しいお気に入りの雌猫が時折庭に現れるようになった。アンに似た器量良しで、アンより狐色で虎縞も目立たないが、毛並みは普通の日本猫である。東京のアンの子にも似ているが、アンの子はペルシャ系の柔らかな長い毛であった。ふと信子は東京から越した後の、あの親子の運命はどうなっただろうと思った。いなくなった一匹を探して、真剣な眼差しで縁側の前をウロウロと中を覗いていた母猫の表情を思い浮かべた。運送会社の若い男が、庭の隅の黒い子猫をつまみ上げて「みんな目がつぶれている」と言っていたことも思い出された。親子とも餓死したのだろうかと思うと胸が痛んだ。

この若い雌猫もなかなか賢そうな目をしている。信子に餌を求める様子もなかった。何処かの飼い猫なのだろう。ナスビの奥方に相応しいと信子は思った。

二月初旬、インフルエンザが猛威を奮った。和雄も信子も四十度近い高熱に呻吟していた。榎子も熱が出て食を拒んだがインフルエンザではなさそうであった。お年寄りがインフルエンザで続々亡くなっていることも報じられていた。和雄と信子は、自分たちが正常になるまではと榎子に近くの医院に入院してもらった。しかし十日後に退院した榎子は、もうおむつの人になっていて、二度と歩くことは出来なかった。

榎子の退院後は、町から電動のベッドが支給されたので、庭が見えるようにそれを据えた。空気のクッションが自動的に動き、褥創が出来ないように工夫がされていたが、すでに入院中から褥創は出来てしまっていた。まだ介護保険の施行前だったので、行き届いたヘルパーのサービスがはからずも無料で受けられる恩恵に預かった。それは本当に有り難いことであった。毎日交代で、ヘルパーさんがガーゼを替え手当てをしてくれる。週二回は四人がかりで入浴のユニットを運び込んで、丹念に入浴もさせてくれた。

食事は自分で食べるのを面倒がるので、早くから信子が口に運んでやるようになった。榎子は元気な頃何度か「部屋の品物が無くなった」と信子に言った。何も覚えのない信子は榎子の部屋には絶対に入るまいと思っていた。しかし、もはやそんなことを言っではいられなかった。

和雄は入れ歯の洗浄器を買った。そしてきれいにした入れ歯を何とか口に納めようとするのだが、どうしてもうまくいかなかった。食べ物は噛まずに済むように、柔らかくするか細かくするかして与えねばならない。しかし榎子は素材が何か分からないようになったものは食べなかった。ご飯も固いものを望んだ。魚の身をほぐした残りや食べ残しの刺身などは、恰好の猫どもの餌となった。

五月の初旬の朝、信子は榎子にご飯を食べさせながらぼんやりと庭に目をやった。すると新緑の芝生の上に、何処からか美女のナスビの奥方が現れた。四匹の子猫がコロコロとあとを追って走っている。四匹とも黒味がかかったナスビそっくりのフワフワの毛並みである。十分ほど日当たりのよい庭でじゃれあってから姿を消した。

ある雨上がりの夕方、車で帰宅した夫妻は、車庫の横に丸めて置いてある

葦簾の上に二匹の子猫が死んでいるのを見つけた。外傷もないから襲われたものでもないようだった。和雄がシャベルで竹林の中程に穴を掘って埋めた。つまみ上げた信子はそれが以外に軽いのに驚いた。フワフワの毛の下の体は思いがけず痩せていたのだった。

二三日してまた雨であった。夕方、雨はやんだものの冷えて寒かった。信子は足洗い場の脇の泥の中に二匹の子猫が倒れているのを見つけた。近寄って見ると一匹は殆ど死にかかっている目もうわずっていたが、一匹は以前のアンのような状態で、目を開けてミヤアと啼いた。もう死ぬ間際の子猫は空き箱に入れ、雨の当たらぬように挿し掛けの下に置いた。もう一匹は大きめの段ボール箱に古いセーターを敷いてその中にふんわりと入れた。最後の二匹を生かすにはママの授乳が一番に違いない。この寒さが大敵なのだろうから風呂場で授乳してくれればよい。箱を風呂場に置いて母猫を誘導しようと信子は考えた。

やがて母猫がウロウロし始めた。裏口から風呂場までには洗面所を抜けなければならない。信子は、全てのドアを開け放し、子猫の音が外に聞こえるようにしてから、刺身の切れ端を点々と風呂場まで置いた。しかしママ猫は入口までは来るものの、決して中に入ろうとはしない。その用心深さはこの猫が野良であることを証明しているように思えた。

結局諦めた信子は、裏口の挿し掛けの下にその子猫の入った段ボール箱を出して、傍らにママが気づくように猫の餌を入れたトレイを置いて夕食の支度に戻ったのだった。

翌朝箱を覗くと子猫はもういなかった。探すと十五メートルほど離れた枇杷の木の前根元にじっとうずくまっていた。ママ猫は啼きながら探しているが、方向違いの所をうろついていているばかりで、見つからないらしい。鼻が効かないのだろうか。信子は母猫がいなくなった隙に子猫をまた前日の箱に戻した。一匹くらいは育たねば可哀相に思えた。

箱を車に乗せると、信子は川内の馴染みの獣医さんの所へ走った。獣医さんは

「栄養失調の上に風邪を引いている。育つかなあ」

と言いながら、グイと背中を掴んで注射した後、細長い管を口から胃袋まで通して液体を流し込んだ。

信子は薬とともに子猫用のミルクと哺乳瓶を買って帰った何とか飲ませようとするが、吸う力もなかった。結局アンに薬を飲ませるときの針のない注射器で無理矢理ミルクを口に流し込んだ。

子猫は死にこそしなかったが、すぐには元気になる訳でもなく、信子は一日おきに三回ほど獣医まで注射に通った。

「これは高価なものですがね、とても栄養価の高い薬です。常温では溶けるから冷蔵庫に入れておいて、少し指にとって口の周りに塗ってやれば、ペロペロ舐めますよ」

と獣医は言って、太い歯磨きのようなニュームのチューブ入りの薬をくれた。外国製のその薬は子猫にとってはたまらなく美味しいものようだった。ワイン色の軟膏で塗ってやると夢中になって口の周りを舐めまわした。そしてぐんぐん栄養が吸収されて行くように思えた。

この子猫は左右の足の模様が違う。左は狐色で右は体と同じ灰色がかった黒である。このいたずらそうな目をした弱々しい雌猫に、信子は「長靴下の

ピッピー」にあやかってピッピと名付けた。

ピッピはついに哺乳瓶に吸いつくことはなかった。信子は口を開けさせてはミルクを注射器で注ぎ込んだ。ピッピは目を白黒させながらゴクンと飲み込むが、三分の一は口の周りからこぼれ出る。その後の口の周りをタオルで拭くのだが、そのうち肌に付着したものが固まって来て、毛皮がごわごわになった。しばらくしてその下に新しい肌が出来ているのに気がついた。ごわごわの部分が持ち上がって来て、やがて少しずつ剥がれ初めた。信子は鋏で剥がれた部分を切り取ってやった。右頬はうまく切り取れたが、そそっかしい彼女は左首のまだ剥がれない皮膚を少し切ってしまった。じわっと血がにじんで来る。あわてた彼女は消毒の赤チンを塗ったのだが、只でさえ剥げた顎や喉も無惨なのに赤チンまで付けて、暫くの間はなんともみっともない顔をしていた。

しかしピッピは恐ろしく頭が良かった。爪研ぎの板も一度に覚え、必ずそこでガリガリやる。小さな間は部屋の隅のアンのお古の砂のトイレで用をたしていたが、三ヶ月目に入った頃、信子は外での排便を促そうと例のカッチンから外に押し出した。すると暫くして教えることもしないのに、カッチンから入って来るではないか。かくして一度で出入りを覚えてしまったのだ。ナスビやアンは覚えるまで何回も繰り返して出し入れしてやったのだったが。

またピッピ大変なおしゃべり娘であった。隙があれば信子の膝に跳び乗って、体をすり寄せゴニョゴニョ話かけるのだまた「ピッピ」と語りかければ何回でも「エエ」と返事をする。そんなおしゃまなピッピを、ずっしりと肥ったアンはソファの上から目をしょぼつかせながら見ている。

子猫がいなくなったママに、直ぐにナスビが目をつけた。誘惑の啼き声をあげて近寄っている。見るとまだ産後三四週間ほどしか経っていないのに、ナスビがママの上に股がっている。ママも逃げるようで逃げない。放っておけば死んでしまうような子猫を、もうこれ以上産ませたくないと思っただ。ナスビはもう五年間も恋を十分楽しんだことだろうから、そろそろ年貢を収めてもいいだろう。信子はナスビを籠に入れて例の獣医さんに連れて行き、断種の手術を依頼した。

戻って来たナスビは、まだ相変わらずボスの気分にいる。見かけは全く変わらないのだが、啼き声がまるでドスの効かない甲高い声になっていた。

八月になった。ママがまた子猫を産んだ。手術前のナスビの最後の子である。前回は何処で産んだのかわからなかったが、今度は物置の床下であった。子猫が動き回るようになったとき、信子は車庫と物置の間にバスタオルを入れた段ボール箱を置いた。

子猫は二匹だった。一匹は明るい黄色でもう一匹は黒い。どちらもナスビの柔らかい毛並みを受け継いでいる。信子は車庫にカリカリの猫食の入れ物を置いて、アンとピッピの食べ残しに少し足して毎朝入れてやった。栄養失調で死なれたら叶わないよ思った。しかし人影を見るとママはさっと子猫を連れて隠れる。ピッピが家の中にいることを察しているらしかった。子猫を信子に取られると思っているのだろう、ママはすごく警戒している。

一方、檣子の容体は思わしくなかった。少し熱が出ると何も食べない。医院の先生が週一回往診して下さって、漢方薬を二種類与えられているが、それを飲むのも拒む。熱さましの薬は座薬になった。そしてこの頃には信子を「奥さん」と呼ぶようになった。本当に信子が分からないのだろうかと思

は半信半疑である。世話になっている信子に、素直に感謝の表現をしたくないのかも知れないと信子は思った。第三者の「奥さん」としてなら「ありがとう」と言えるのかもしれない。幼児期、継母にいじめられて育ったという槇子には、伺いしれない屈折した思いがあるようであった。

とはいえ若いヘルパーさんが来ると嬉しそうにする。

「あんたは美人だねえ」

などとお愛想も言う。鹿児島弁での会話がうれしいのだろうと思い信子もほっとする。ヘルパーさんは、毎日褥創の手当てや身の回りの世話に三十分ほど費やして、おむつも手際よく替えてくれるが、その間は全くおとなしい。朝晩は和雄と信子がおむつ替えをするのだが、それが実に大変な日課となっていた。何度言い聞かせてもその都度「何をする」と怒鳴って脚を硬直させて拒むのだ。少しのことにも堪え性なく「痛い、痛い」も連発する。骨と皮ばかりに痩せている体だが、扱うと以外に重い。このヘルパーさんのときとの態度の違いは、槇子の一種の甘えの表現なのかもしれないのだが、信子にはわざと困らせているのかとも思えるのだった。

車庫の子猫は、夏のことであり順調に育っていた。餌の容器をカラカラと鳴らしながら信子が近づくと、子猫は車庫の隅からじっと信子を見つめている。黄色の方は金色とも思えるきれいな色で、これはナスビのママの遺伝だろうと信子は思った。黒い方は見るからにナスビそっくりである。

ある朝黄色の子猫がいなくなった。とても元気にしていたから、一夜で死ぬとは考えられない。珍しい色の猫なので、ウロウロしている所を誰かが連れていったのだろうと思われた。車庫のある裏門は、車が自由に出入り出来るように大きく開いている。残りの黒猫はママに殆どピッタリと付ききりになって、人を見るとさっと隠れる。

夏も終わりに近づいた。槇子はますます食が細くなった。少量のサツマイモやカボチャ、煮豆などの他は受けつけない。好きだったメロンやアイスクリームにも首を振る。週一回往診に来る医師が、点滴で栄養を補給するようにしようと言った。毎日昼前に看護婦さんが痩せ細った腕に点滴をセットして帰る。

九月の末には、槇子は口をへの字に曲げて何も食べなくなった。「もう食べてやらないよ」という最後の困らせにも思えた。夜、信子はトイレに起きる度に、そっと槇子の寝息を伺った。日一回の点滴だけで何日もつのか不安だった。和雄は医師に相談して入院させることにした。

翌日病院から電話があって、管で流動食を流しこむが、そのまま便に出してしまうから、ぼろ布を持って来るようにという。信子はネルの寝巻を引き裂きながら、入院させた方がよかったのだろうかと考えていた。どっちみち回復の見込みはないのだった。

一週間後の早朝、槇子は息を引き取った。

葬儀が終わって、広い家がひときわガランとした感じになった。信子は夜トイレに行くときなど足音を忍ばせたり、ドアの開け閉めにも無意識に音のしないよう気を使っていた自分に気づいた。「ああこうした気遣いは無用になったのだ」と思うと、信子にはわかに淋しさを覚えるのだった。

虫の音も絶えて、夜はぐっと冷え込むようになった。信子が台所に立つと頭の良いピッピはその気配を察して、外から勝手口に回って待っている。カ

リカリの餌は寝室にあるのだが、調理の時の魚や肉の切れ端を期待しているのだ。信子も刺し身の両端や鶏肉の皮など少し残しては買った時のトレイに入れて勝手口に置いてやる。以前は雀がよく来たものだが猫の数が増えてからは滅多に來ない。

いつかママと子猫もピッピと並んで勝手口で待つようになった。ママは春先の狐色の毛色が黒ずんで來た。二度の出産でやつれているようだ。子猫はナスビにそっくりの顔であるが、目つきが疑い深そうな上目使いである。信子はこの猫たちも我が家の猫どもの仲間にしてあげようと思った。ママはともかく子猫はナスビの最後の子である。

ある日、用心深い親子二匹を餌で釣って、何とか寝室に入れることに成功した。入ったのを見届けて信子はドアをバシッと閉めた。二匹はパニックになって出口を求めてぐるぐると駆けめぐっている。信子は納戸への板戸を十センチほど開けて、部屋の外に出た。親子はやがて自力でキッチンを見つけて外に出た。そんなことを二三回繰り返した後、信子はこの二匹に車庫で餌をやることを止めた。

親子はいつしかキッチンから出入りするようになった。信子は母猫はママと呼んだが、子猫にはチッチと名付けた。ピアノの上にある陽子の小さなときのマスコット人形、モンチッチに何となく似ていたからであった。信子は、ナスビと同じ色なのでチッチを雄だとばかり思っていたが、捕まえて調べると雌猫だった。

信子が親子を家猫にしようとしている理由に、ノミ駆除のことがあった。ナスビもアンとも二ヵ月ごとにノミ駆除の薬を首筋に垂らしてやっている。その薬は東京にいた頃出回るようになったものだ。ピッピはまだ子猫なので、薬はきついだらうとノミ駆除用の首輪を巻いている。犬猫兼用のその首輪は子猫には長いので、信子は二つに切り分け、その両端に穴を開けリボンを通してピッピの首に巻き着け、娘らしく臙脂のリボンで結んでやった。この頃には、みっともない顎の剥げたあとにもすっかり毛が生え揃って、耳の中や頬から長い毛が外にブラシの様に出はじめている。狐色の尾っぽもふさふさと立派である。

蚤の駆除は猫がベッドにもぐってくるのを許すための最低の条件である。信子は外でピッピがチッチとじゃれているのが気になっていた。薬を垂らすなり、薬の首輪を着けるためには、捕まえなくてはならないし、それには先ず手懐けなければならない。特にママには避妊手術が必要である。

チッチの方は、時折捕まえることが出来るようになった。抱き上げて撫でてやるが、身をすくめて固くなっている。下におろすとホッとしたようにこそそそと逃げる。姉のピッピはおしゃべりなのに、この妹のチッチは一言も声を出さないしかし二匹ともナスビの子だけあって、抱き上げてもそのずんぐりした足の爪を出すことはしない。信子はチッチに残りの薬の首輪をグリーンのリボンで結んでやった。姉妹は寝室でも仲良くじゃれあうようになった。

冬になった。槇子の部屋の整理も殆ど終わった。数知れないほどの衣類の山との格闘だった。同じようなブラウスやスカート、半コート、下着類の山であった。全てSサイズで色や型は洒落たものだが、特に上等なものはなかった。信子は質の良いものを少量大切に着ていた自分の母とは対照的だと思った。言ってみれば、生きざま全てが対照的であった。

大半は思い切って捨てることにした。新品やまだ捨てるには惜しい物は、形見や野良着などに分類して親族や近所に分配した。全て片付け終わった部屋は、冬の日が良く差し込んで明るく、それがまた侘しかった。

ナスビは断種の手術をしたにも関わらず未だに夜の外出癖は直らない。子猫どもがうるさいこともあるのか、一日に二三時間しか家にいない。という事は、何処かに檀家が出来ているのかもしれないと信子は思った。いつかテレビで猫の習性についての番組をやっていて、一匹の猫を自分のものだと思っている人が何人も居たということを知っていた。それとも長く密集した毛皮を着ているから、寒さには平気で、孤独を楽しんでいるのだろうか。

ママの方は、夜中にこっそり納戸に来てはガサゴソと餌を食べてまた姿を消す日々であった。しかしそのうちに納戸の隅で眠るようになった。こちらは寒さに耐えられず、背に腹はかえられないということだろう。しかし信子と目が合うとそそくさと外に出る。餌は食べても身ごなしには隙がなく、信子には指一本触れさせないのである。

寝室の姉妹は部屋も狭しと駆けめぐる。和雄も信子も昼は殆ど和室の茶の間なので、子猫たちの天下である。二匹はソファの上からじっと眺めているアンを尻目に、ボールペンのキャップなどでサッカーをやっていたりする。部屋の南も北もガラス窓は障子が付いているが、一度破れるとアッという間にぼろぼろになった。しかし信子はきちんと張り替えれば故意に破ることはないだろうと思っていた。

そして正月を前に信子は大方の障子を張り替えた。以前やっていたように、障子の棧を濡らし紙をはがした。新しい紙は昔と違って一枚で障子一枚を覆うほどの大判である。廊下に逆さに立てかけて左上から一段ごとに貼っていたのとは勝手が違った。大判一枚というのは簡単の様でなかなか大変である。それでも障子屋さんの費用を節約しようと奮闘して八枚ほど張り上げた。そして信子の思った通り子猫たちは新たに破ることはしなかった。

春になった。ピッピは大きな洋服筆筒のてっぺんに登って下を見下ろし、じっとしていることが多くなった。

三月下旬のある夜明け頃、ピッピが何かわめきながら布団にもぐり込んで来た。うるさいので信子はベッドの下に出した。そんなことを二三回繰り返すので、どうしたのだろうと和雄に言った。

朝食を済ませて寝室に入ってみると、ピッピは枕元に六七センチのネズミの子の様な子猫を産み落としていた。信子はアッと驚いたが、ピッピを気づかって声を飲み込んだ。段ボール箱にタオルを敷いて指の長さほどの子猫をそっとつまんで入れ、うろたえているピッピもその中に入れた。枕元のシーツに水っぽい血のシミがあった。シーツを剥がして洗濯機で洗うと、まだ時間が経っていなかったのできれいに落ちた。マットのシミも濡れタオルできつく拭き落とし、ベッドカバーで覆った。

暫くして様子を見に寝室に戻った信子は、ピッピが再びベッドの上にいるのを見つけた。二匹目が生まれていた。前の子猫も連れ込んでいた。昼過ぎまでに三匹目も生まれた。ベッドカバーも洗わねばならなかったが、ポルトガル製のそれは化繊のザクツとした織物で、シミも着かずすぐに乾いた。信子は全部の子猫とピッピを箱に戻した。信子の顔を見上げて、どうかしてくれとも言わんばかりにミャアミャア啼くこの幼いママに、果して子猫が育てられるのだろうかと思った信子はピッピを抱き上げて、乳房をよくマッサー

ジしてやった。初めの二匹は真っ白い猫だが、後のは顔にまだらのある黒い猫である。二十日ネズミの小さなものそっくりで、まだ乳房に吸いつくこともしなかった。

夜になった。、ピッピがまた子猫を和雄と信子の中に全部連れて来た。寝返りを打てば潰してしまいそうだ。信子が箱に移しても暫くしてまたベッドに連れ込む。そんなことを二回繰り返す夜が二日続いた。二人は熟睡出来ない。

「猫は普通は人を見れば隠すものだがなあ」

と和雄も呆れ顔である。どうやらピッピはナスビやママなど他の猫を警戒しているらしかった。そのうちピッピはライティングデスクの下の深い引き出しが開け放しにされているのを見つけて、その奥に子猫を移して引きこもった。下手に引き出しを閉めると押しつぶすことになる。信子は奥に板を当てがって、間違っても閉めようとしても動かないようにしてから、ボロのセーターを入れてやった。ピッピはそこが落ち着けるらしく、それからは移動しなくなった。

東南の檣子のいた部屋は、春の日が差し込んで明るく暖かである。濃いピンクの枝垂れ桃の花や白い花水木の花が見渡せた。信子は長年欲しいと思っていた和鏡台を庭に面して置いた。ここは子猫どもに邪魔をされないの、座卓を置いてワープロも持ち込んだ。そのうち書類の入った棚も置くようになり、完全に信子の仕事場となった。

朝の三時頃からの三時間ほどが、信子の一番仕事の出来る時間である。信子は和雄の眠りを覚まさずワープロに向かうために茶の間の座卓に広げていたが、来客も多いので日中は片付けねばならなかった。この部屋は一日中広げたままにしておいて何時でも使えることが出来る。信子はそれをとて嬉しく思っている。早朝はひとしきりワープロを打って六時になると、また一時間ほど朝寝に寝室に戻るのが日課となっている。いつもはピッピが喉を鳴らしながらもぐって来るのだが、このところは専ら子猫を抱えてじっとしている。

信子はピッピもチッチも避妊手術を受けさせるつもりだった。しかしアンの癩癩の原因が手術の時期が早すぎたのかもしれないと考え、十ヶ月目くらいで受けさせようと思っていたのに、なんとその十ヶ月目に母親になってしまったのだ。この分では三ヶ月遅れのチッチもすでに妊娠しているのかもしれないなかった。

そういえばチッチもカバーを掛けられたピアノの蓋にうずくまっていることが多くなった。ナスビそっくりなのだが、小ぶりでもまだピッピよりも一回り小さい。八月生まれなのだから七ヶ月を過ぎたばかりである。野良猫だったチッチは、ピッピのように我が物顔で信子のベッドに入ってくることはしない。ベッドで産む心配はないのだが、万一の出産のことを考えて、初めにピッピの赤ちゃんを入れた段ボール箱を納戸に置いて、そこにチッチを入れた。チッチはすぐに出てしまうが、何回か繰り返し、そこが入ってもよい場所であることを分からせることは出来たようだった。

ピッピの出産から一ヶ月ほど遅れて、チッチも用意した箱の中で二匹の子猫を産んだ。黒っぽい縞のある、如何にもありふれた日本猫だが、二匹とも目がパッチリとして双生児のようにそっくりの顔をしている。ナスビの面影

も毛並みも全然受け継いでいない。チッチはじっと口を結んで啼き声一つ立てない。まだ九ヵ月しか経っていない、自分もまだ子猫の身分なのに、もう母親である。甘ったれピッピに比べて健気で、じっと我慢している姿は「おしん」を想像させるものがあった。信子は「おしんのチッチ」と声をかけるのだった。時折顔を出して、餌を食べ、部屋を一巡りして出て行くナスビは、子猫を見ても、そうかというように鷹揚に構えていて、決して危害を加えるようなことはしない。ボンヤリのアンは却ってピッピやチッチに無視されている。アンは他の猫の食べ終わった頃にそっとカリカリと食べて、またソファにうづくまるのだ。

五月初旬、今年もまた雨の寒い日が続いた。夜中にベッドの下から何匹もの子猫の声が聞こえる。おかしいと思っていると、ベッドの下からママが出て来るではないか。ママはチッチと同じ頃、外で産んだものの、寒さをしのぐにはここへ連れてくるのが一番と思ったに違いない。和雄も信子も危害を加えないことを知っていたことであった。

ベッドの前後は床までの板で隙間はない。和雄の側は引き出しになっているのでこちらも隙間はないのだが、信子の側は床から七八センチ空いている。ベッドの両脇わきに、それぞれの整理筆筒を置いてあるので、和雄の頭寄りの引き出しの一つは引き出せないし、床に頭を着けてベッドの下を覗いても見通せないのである。ママは実に賢い猫である。

ピッピの子猫がライティングデスクの引き出しから首を出すようになった。信子はアンやピッピの子猫時代に使っていたプラスチックのカバーの付いた猫用のトイレに、専用の砂を入れてデスクの下に置いた。ちょこまかと動き回る柔かな白い毛で覆われた大柄な二匹は、両方とも雄である。一匹は賢そうなパッチリとした黒い目をしているが、もう一匹は目やにが出て半分閉じている。脱脂綿を湯で濡らし拭き取ってやるのだがなかなか治らず、目の開かない状態でいることが多い。やや小ぶりな黒い方は雌で、顔の茶の模様が左右対象でないのがご愛嬌である。三匹とも太い足、ふさふさの尾っぽはピッピゆずりで爪を出さず、人を怖じることもない。トイレもすぐに覚えてネズミの糞のような便をする。

やがてチッチの子猫も箱から出るようになったので、入っている段ボール箱を納戸から寝室の猫用トイレの近くに移した。一回りは小さなチッチの子猫をピッピ親子は少しもいじめることはない。五匹はすぐに仲良しになって、ころころとじゃれて遊ぶ。信子が手を伸べると少し逃げるが、捕まえて教えると、チッチの子もちゃんとトイレで用を足せるようになった。

一方用心深いママは信子のいる間はじっとベッドの下で子猫を抱いている。いなくなるとその隙に餌を食べたり、用を足したりしているようだ。やがて子猫がベッドの下からパッと走り出ては戻るようになった。しかし大変な臆病猫どもで信子を見るとすぐに隠れる。そんな訳でママの子たちにはトイレを教えることが出来ない。ピアノの脇にこっそりしてあったりする。一度すると同じ場所が便所になってしまう。信子は消臭用のスプレーを買って来て、拭いたあとに入念に吹きつけるのだが、気がつくともたそこが濡れている。黒い毛虫のような糞もしてある。和雄に見つかる嫌がるので、信子はトイレの巻き紙を手近においてその都度拭き取り消臭スプレーを掛けるのだった。

ママの連れて来た子猫は、明るく薄い茶色の猫が二匹、グレーの濃淡の猫が一匹である。茶色の二匹はそのうちトイレを覚えたが、グレーの猫は並外

れて臆病で、姿を見せることも殆どない。そしていつまでもピアノと本棚の間が汚れているのだ。

この頃になると流石に全て大目に見ていた和雄も「どこかへ捨てて来い」という。信子も時には同じ思いになることもあるのだが、かといって実際に実行する気はなかった。和雄にはなま返事をしてやり過ごすしかなかった。

子猫は特に離乳食を必要としなかった。ナスビ、アン、ピッピーは粉ミルクからの移行でいろいろと与えたが、この子猫たちは動き回れるようになると親猫のカリカリの猫食をいきなり食べ始めた。親猫どもにはいつも洗面器にたっぷり入れてあるのだが、子猫にはそれでは深いので浅い植木鉢のトレイに入れてやった。

ママの子猫もベッドの下から出て来て餌を食べるようになった。ところが野良の血だろうが、他の子猫のように皿の前に立って行儀よく首を延ばして食べるのではなく、前足を皿に突っ込んでガツガツ食べるのである。これは躡ける必要があると信子は思った。

時折与える缶詰の缶を洗って猫の数だけ揃えた。そしてそれに七分目ほど餌を入れて一匹ごとに与えるようにした。小さな入れ物なので足が突っ込めない。この躡けは成功してやがてママの子も洗面器で与えても前足を入れることをしなくなった。

信子は毎朝猫のトイレの掃除をせねばならない。子猫の成長に従って量が多くなっている。それに梅雨期でもあり、雨が続くと横着なピッピーまでそれを利用したりする。トイレ用の砂の袋には「消臭」と書いてあるが、それも程度の問題であって、手抜きする訳には行かない。きっと肥料になるだろうと、石楠花や百日紅の根元に、砂を篩っては固形の部分を捨て、蠅が来ないように土を掛けるのである。雨の朝などは大変である。濡らすと固まる性質の砂なので、雨が掛からぬように軒先に置いて作業しなければならない。うんざりしながらも信子は経験で、これも一時の辛抱であり、いずれ成長すれば猫どもは外でやるようになることを知っていた。

親猫たちは、もともと親子でもあるので、喧嘩をすることもない。やがて仲良く共同保育が始まった。子猫もどれが自分の本当の親なのか分からなくなっているようだ。一匹の親猫が横になると、一斉に子猫はその乳房にしゃぶり付く。そして親猫も分けへだてなく嘗めまわし、乳を与えるのであるあぶれた子猫にはまた他の親猫が与えている。

ベッドの下からなかなか出て来なかったグレーの猫も時折出て来て、信子が見ていても乳を吸うようになった。他の子猫と一緒に遊ぶところまではいかないが、信子が「ウスラバカちゃん」と呼ぶその極端に臆病な子猫も邪険にする猫はいない。みんな優しいなあと信子は満足して眺める。

しかし八匹の子猫はいかにも多すぎる。大きな猫でさえナスビ、アン、ママ、ピッピー、チッチの五匹もいるのである。入来町は人口六千人の小さな町である。猫食の大売出しのあるような大型の雑貨店はない。大量の猫食を安く手に入れるには、川内か宮之城まで行かねばならないし、バカにならない量を必要とする。信子は訪れて来る客に貰ってくれないかと聞くが、なかなか貰い手は見つからない。

和雄の家を新築した大工さんは近所に住んでいる。夜一杯飲みたくなると和雄は声を掛けては呼び出す。ある晩子猫の件を相談すると、

「何処かに捨てて来てあげましょう」

と言う。

「猫獲り器で捕まええて、橋の上で口を開けてやれば自分から飛び込んでポアしてしまいますよ」

とも言う。信子はそれだけはしたくないと思う。それには信子の少女時代の思い出があるからだ。

終戦後、信子の父が中国から復員してから二三年経ち、俄か商人となって始めた仕事も順調だった頃のことである。菩提寺の和尚さんが衣の袖に白黒の子犬を抱えて来て、信子に下さった。まだ食料難の時代であった。信子は自分の食べ物を分けてやって大変可愛がった。それは雌犬だった。梵文学者だった信子の父が「ナンデー」と名付けた。サンスクリットの「喜び」の女性名詞だという。ナンデーはやがて町中の雄犬が集まって来るかと思うほどのもてもてになり、五六匹の子犬を年に二回も産むようになった。信子の母は、いつも一人の店員にその始末を頼んでいた。

その店員は農家出身だった。信子が思い出すのは、ある時彼が大きな漬物樽にいっぱいゲンゴロウを運んで来たことである。蛋白質源になるのではと言うのであった。信子の家族は口にしなかったが、何人かの店員はバケツに入れて持ち帰った。どんな料理になったことだろう。地方とはいえ小都市の町の住人には配給以外の食べ物を手に入れることは難しかった。信子の弟は友人の家で蝉を食べたと言っていたし、信子の母は蚕の繭から糸を取ったあとのサナギを手に入れて来て、空煎りして信子たち兄弟に食べさせた。

「ムシムシ」と呼んでいたそのサナギは、結構香ばしくて御馳走の部類だった。今の子供たちには想像もつかない話だろう。ゲンゴロウもミズスマシも目にしなくなって久しい。

それから五十年ほど経って、信子は父の葬儀のときにその昔の店員に会った。もう八十歳近くになっていたろうか、日焼けした顔は酒焼けも加わっていて、リュウマチなのか足を引きずっていた。ひとしきり不幸続きの身の上話をした。そして

「お母さんに頼まれれば、そりゃあいやとは言えねえからねえ。六斗の橋の上から何回も子犬を捨てたもんでねえ、その祟りだったずら。そうとしか思えねえね」

と言った。六斗というのは諏訪湖に流れ入る主流の六斗川のことである。信子はやはり祟りということもあったのではないかと、気のよい彼を気の毒に思った。優しい母とて人間が生きて行くのさえ必死の時代に、子犬まで気づかうゆとりなどなかったのだろう。今また夫の友人をそんな目に合わせる訳にはいかない。

一計を案じた信子は、ベッドカバーの上に子猫を並べてその写真を撮った。何枚かの中からよく写っているものを「子猫差し上げます」と書いた紙に貼った。自分の名前、電話番号も書き添えて、信子はそれを獣医さんの待合室に貼り出してもらうことにしたのだ。

獣医さんの待合室には、犬や猫に関する何冊かの本が立てかけてあった。中に猫の品種や選び方の出ている本があったので、信子はパラパラめくって見た。ふと見るとピッピそっくりの猫が載っている。耳や顎から毛が張り出していて、ずんぐりした脚とふさふさしたしっぽをしている。毛色はいろいろあるが、アップに写されているのはピッピと同じ狐色に黒い毛の混じって

いる猫である。「ノルウェイジャンフォレスト」という名前で、温厚で賢い、定価は十五万円と書いてあった。ピッピもチッチも母猫は日本猫のママだから、ジャンフォレストの形態や性格は全て父親のナスビ譲りのものである。どの子猫も母親に似た猫は一匹もない上に、子供同志もそれぞれ全然品種の違うものの混在である。結局猫は雄の遺伝子が優先するのだろうか。

それにしても十五万円もする猫を生ませるナスビに、パイプカットの手術をしたのは勿体なかった様な気もした。しかし手術をしなければ、野良に生まれ続けて、それは捕まえることも出来ないだろうし、下手をするとピッピやチッチなど我が娘にも生ませていたかも知れないと信子は思う。

ピッピの白い子猫に憧れていた出入りの若い店員さんが欲しいと申し出た。黒い目のパッチリした一番可愛い元気な猫をあげることにした。

「夢にまで見ていました」

と大喜びで帰った。その後病院の写真を見たという人が二人来た。信子はピッピのファニフェエスの黒の子とチッチの子をあげることにした。ピッピのもう一匹の目やにの白は手放したくなかった。目は獣医さんから目薬をもらって来て治っていたが、ピッピの子として雄の一匹は残したかった。結局三匹は引き取られて、残りは五匹となった。

残したピッピの白猫はやや狐顔で、ピンと胸を張って座り落ちついた気品のある雰囲気である。信子はバーネットの小公子のセドリックを連想して「セデイ」と名付けた。他の子猫はまだ「チッチの赤ちゃん」「ママの赤ちゃん」と呼ぶだけで固有名詞はない。

ある日の午後、回覧板を持って近所の陽気な後家さんが来た。もう還暦は過ぎただろうし、経済的には不自由ない筈の人だが、隣の町にパートで出掛けているので日中に会うのは珍しい。足元にピッピが寄って来た。

「今子猫が五匹いるんですよ。一匹いかが？」

と信子は例によって尋ねた。信子が庭からベッドルームの窓際に寄って声をかけるとママの茶色の子猫が顔を出した。

「いいや結構です。うちには大きいのがいるんですよ。私も猫は好きで、前は十匹くらいいたんだけど。この茶色のはヤスって言うんですよ。可愛い顔してる」

と窓越しに品定めをして言う。それが雄だと言うと

「ヤスの雄は珍しいんですよ。それにこんなにきりょうよしだからお家で飼ったらいいですよ」

という。ほめられたヤスは「ヤスベエ」と呼ぶことにした一際大きな張り付けたような黒目がちな目が波乃久里子の目に似ている。ママのもう一匹もヤスの雄である。それはヤスベエより小ぶりでママが連れて来たときから鼻をぐじゅぐじゅいわせている。一般の猫の顔で特徴はこれといって無いが、一番人懐っこく信子の顔を見上げてすぐにすり寄ってくる。そちらは考えもなく「ヤス吉」と呼んだ。野良ママの父親もわからない子猫に特別に名前を考える気も起こらなかった。ヤスは従来 of 日本猫で、抱かれていてもじゃれるときなどすぐ爪を出す。

もう一匹のママの極端に臆病なグレーの雌猫は「ウスラバカのウス」と呼んでいた。痩せた細い体ですらりとした尾が長い。ベッドの下に長くいてママから離れるのが遅く、最後までトイレを覚えなかったし滅多に人前に出て来ない。カッチンの出入りを覚えてからは、殆ど一日中庭の繁みの中に潜ん

でいる。

チッチの残った一匹は「タマ」と呼んだ。典型的な日本のサバ猫で、顔だけは可愛いがおしんのチッチと同じ警戒の目つきである。キーという高く細い声で啼きながら、信子に擦り寄って来る。

どの子猫も自分の母親が誰なのかわからなくなって、どの親猫にもしゃぶりつく。子猫同志も、大が小をいじめることもなく、全て仲良しである。親の乳からいきなりカリカリの猫食を食べ始めることにも信子は感心する。どの猫も食べることを覚え、カッチンの出入りを覚えて、自然と排便も外でするようになった。

しかしこれ以上ピッピとチッチに子猫が産まれてはかなわない。三ヵ月ほどの間隔しかないのに次の子を産んだママのことを考えると、ぐずぐずしてはられないと信子は思ったそこで出産した順に避妊手術を受けさせることにした。

それまで猫どもの通院は段ボール箱に入れてであったが、プラスチックの猫運搬用ケージを買って来た。先ずピッピからである。「おしゃべりピッピ」があだ名なのに車の中ではじっとして無言である。雌の手術は病院で二泊する。信子が手術後迎えに行くと、ピッピは気弱そうな目で信子を見上げた。帰ってケージから出すと早速子猫どもが寄って来て乳房を求める。ピッピは拒みもしないで横になるのだった。

十日ほどおいて次はチッチの番である。チッチは生後三ヵ月ほどママのもとで野良猫だったから何処か用心深い目つきをしていて、信子が手を差し伸べると後ずさりする。喜んで飛びついてくるピッピとは違う。ケージに入れると落ち着きなくゴソゴソとしている。手術後連れて帰る車中、それまでは殆ど無言のおしんのチッチが、初めてニャアニャアと猫らしい声で泣いた。きっと病院で他の猫が泣くのを聞いて覚えたのだろうと信子は思った。信子の猫はどれも甘えて鼻を鳴らすことはあっても、ニャアとは啼かないのである。ゴニョゴニョという啼き声は、自分が猫である自覚が無く一人前にしゃべっているつもりなのかも知れい。チッチのニャアニャアはその帰途だけのもので、家に戻るとまた口をきりっと結んで、声を出すこともしなくなった。

さて難問は残ったママの手術である。信子が近寄るとさっと逃げて手を触れることさえ出来ない。困った信子は獣医さんに頼んで睡眠薬をもらった。一錠か二錠飲ませれば十五分ほどで効くということだった。信子はその錠剤の一錠半を細かく刻んで魚の缶詰に混ぜた。余所へ行って眠ってしまったのは捕まえない。信子はママをその餌でキッチンまでつって行き、閉じ込めることに成功した。そこでママは与えられた小皿の餌をペロリと食べた。信子は椅子に腰掛けてじっと眠るのを待った。しかしママは少し足がよろけたものの、警戒の眼はパッチリとして信子を見つめている。十五分して信子はもう一錠半を刻んで与えた。またママはきれいに食べたしばらくすると今度は体を動かすことが出来なくなった。それでも気丈に目だけは信子を見つめている。信子はママをタオルでくるんで抱き上げてケージに入れると、一目散に犬猫病院に向かった。看護婦さんに猫のケージを手渡ししながら信子は「ママの眠っている間にこれを結んで付けて下さい」と用意して来た紫のリボンを通した薬の首輪を頼んだ。

二日後、連れに行った信子に獣医さんは

「何錠飲ませましたか。この三日こんこんと眠り続けていますよ」

と言う。

「一錠半飲ませたのですが効かなくて、また同じくらい飲ませたのです」

「それは多過ぎましたね。あとはゆっくりさせて下さい」

獣医さんは苦笑した。看護婦さんがママをケージに入れて連れて来た。ママはまだ朦朧としているようだったが目は開いていた。頼んでおいた首輪はまだ結び付けられていなかった。看護婦さんはケージの口に手を差し込んで付けようとしたが、首を輪に通したところでママに手を噛みつかれた。あわてて引っ込めた手に血がにじんでいる。野良ママは野良である。この警戒心が身を守って来たのだろう。家に戻ってケージから出す前に、信子は看護婦が首に通しただけでヒラヒラしていたリボンを苦心して結んだ。しかし手術後の化膿止めの薬を飲まずなどということはとても出来ない。やはり噛みつかれるだろうと信子は思った。しかし待ち構えていた子猫どもは一斉にママの乳房にしがみつく。ゆっくり休ませるどころではないのだが、気丈なママはじっと耐えて横になり子猫に乳を含ませている。

鹿児島は暑いのが当然とはいえ、この年はまた格別の暑さであった。昼食後、和雄は茶の間で横になってテレビを眺めたり雑誌に目を通すのが常である。信子は一時間ほど寝室で昼寝をする。ベッドの上に寝ころぶと、リモコンで冷房を入れる。ほっとして目を閉じると、そこで子猫どもの運動会が始まるのだ。ちょっとした紙切れでもじゃれる対象になる。そのうちバツタやセミを捕まえて来ては、皆でいたぶるトカゲも持ち込む。そして板敷きの二十四畳を所狭しと駆けめぐるのである。信子の体の上も遠慮会釈なく走り抜ける。しかし信子はひたすら子猫どもの好きにさせている。

和雄と信子には五人の子供がいたが、今春末娘が結婚して全て親離れが完了した。五人の子供たちと過ごした喧騒も過去のものとなった今、子猫と戯れている自分は、何がしかの母性を満足させているのだろうかかと信子は自問してみる。いやそれよりも、自立したとは言え子供たちそれぞれの抱える問題を考えたり、あまり気心の知れない夫の故郷の人々との関わり方に神経を使うより、猫相手の方がずっと心が和むからだと思う。

子猫の運動会は、夜中の二時頃もう一度開かれる。大抵は夜の戦利品の虫が相手である。セミがジジジと羽ばたきながら床を走ったりする。これには和雄も音を上げて

「どうにかしてくれ」

と信子を叱る。信子は、眠い目をこすりながら、子猫全部を納戸に入れて寝室には入らないように戸を閉めておく。そんなことが二三週間も続いただろうか。いつか夜中の運動会もしなくなった。庭には細くなったとはいえ虫はまだ鳴いている。猫が成長したのか、寒ささえ感じる夜の気温のせいなのだろうか。

すばしこいピッピーは、寝室を出入りする信子の足元を抜けて、茶の間に突進しようとする。料理するときに出る肉や魚の切れ端をねだるためだ。以前はそれを許していたが、何匹も子猫のいる今はピッピーだけにこれを許す訳にはいかない。「ダメ！」ときつく叱るが、なかなか言うことを聞かない。ピッピーを出さずにドアから抜け出るのは技術が要る。ところが和雄が出入りしてもついて行かない。

「お前は猫に舐められている」

と和雄に言われてしまう。しかし大方は寢室のベッドや椅子ピアノなどの上にじっとしていて、爪も爪研ぎ器で研いで大して悪戯もしない彼らは良い猫たちだと信子は思う。

九月に入るとセデイは親猫と同じ位の大きさになった。真っ白だったのにいつか背筋に沿ってセピア色がかった薄い茶色が現れてだんだん濃くなって来た。顔も薄く茶色がかっている。他の猫は毛色は変わらないが、それぞれ子供から少年少女と言ったおもむきになって来た。とはいえママが来るとどれもが乳を求めて寄って行く。ピッピーやチッチはとうに逃げてやらないが、ママはよく五匹を抱えて横になっていたもうそろそろ子猫たちにもノミ駆除の首輪をしてやらねばならない。犬猫病院に買いに行くとそれまでのグレーの首輪はもう無くて、これになるというものを二本買った。袋を開けるとチョコレート色の細いものだった。子猫用に三等分した。両端に錐で穴を開けリボンを通そうとすると、細いのでちぎれそうである。なんとかだましだまし通して五匹の子猫の首に巻いた。子猫たちはうるさがつてカカと前足で搔く。それが原因なのか、ママが授乳しなくなった。ママ自体があまり家に入って来なくなった。一日一度くらい戻って来てもセデイが寄って行くと威嚇して追い返す。この変化は首輪によるものか、野性動物の親子離れと同じ行動なのだろうかチッチもママと同行しているのか殆ど家にいなくなった。

そういえば和雄もこの半年の子猫騒ぎに気を取られて、アンに薬を飲ませることを忘れていたようだ。アンも子猫に気が紛れていたのか、気を張っていたのか発作を一回起こしただけでどうやら薬離れ出来たようである。遠慮深く子猫に譲って信子のベッドにもぐっても来ない。

「アンちゃんは本当に優しいね。お利口だね」

と頭を撫でると、信子を見上げて目をしょぼつかせる。

やがては三匹の雄の子猫も成長してナスビのように放浪に出ることだろう。仲良し同志が恋敵になるのだろうか。この冬二匹の雌に手術を施せばこの猫騒動も一応は解決することだろうと信子は思っている。

十月中旬、和雄と信子は仙巖園を訪れた。関が原四百年の義弘公祭りで竹徑亭で薩摩琵琶の演奏があった。竹徑亭の前に猫神、猫屋があり、猫屋を覗くと「猫神」の由来を書いた額があった。義弘が朝鮮に連れて行った七匹の猫のうち生還した二匹を祀ってあるという。これらの猫は黄、白の波紋で朝鮮で病死した義弘の子久保に愛され「ヤス」と名付けられていたことから、この種の猫を「ヤス」と呼ぶようになったとのこと。偶然呼び名を教えてくれた本人も知らないだろう「ヤス」の語源を知った。今年はやはり和雄と信子二人にとって猫の年である。